

婦人用ゆかたに関する考察

——肩当ての現状——

The consideration on the “yukata” for women

——How do people feel about the “kata-ate” these days——

本 間 小 枝 子

Saeko Homma

The “yukata” is a thin cotton kimono. So, it is strengthened by the “kata-ate” and the “ishiki-ate.”

The “yukata” is supposed to be worn as a comfortable garment to relax in at home and as a kind of bathrobe. Traditionally it was worn without underwear.

Also, people are beginning to wear the “yukata” when they go out.

So, I asked the housewives how they felt about the “kata-ate.” As a result of these inquiries, I found that the ideas about the “kata-ate” have been gradually changing.

This is what I found:

I 緒言

ゆかたは一般に綿織物の単長着で、古くは入浴の際に湯帷子として着用したもので、江戸初期には町々に銭湯ができ、銭湯に行く道中着、風呂上りのくつろぎ着として着用した。白地に藍染のゆかた姿は独特の情緒をもち、江戸市民に親しまれた。現在もなおそのなごりをのこし、湯上りや、家庭のくつろぎ着として着用されているが、染色・素材の進歩により、高級化され、形式にとらわれることなく、外出着にもなっている。

ゆかたの構成は、肩当て、居敷当てのついた単長着で、被服構成実習の基本教材とされている。その際、本学学生から、「肩当ては不要ではないか」と言う発言がしばしばあるので、今後の指導上の課題として関心をもち、先ず、現状の調査を試みた。その結果、若干考慮する点が見られたので報告する。

II 調査方法

調査は質問紙法により、内容は主にゆかた保有と着用状況、肩当ての現状（寸法、必要性）についてである。対象は東京およびその近県の主婦とした。

時期は昭和51年と昭和61年の6月20日から14日間とし、それぞれ400名に配布した。

回収の結果地方別人数、年代別人数は表1、2のようであり、昭和51年は東京、千葉、埼玉、神奈川の1都3県にわたり計344名（有効回答率86%）、昭和61年は東京、埼玉、千葉、神奈川、栃木、茨城、群馬の1都6県にわたり、313名（同回答率78.3%）である。

表1 地方別人数

区分	S 51		S 61	
	人数	比率	人数	比率
東京	236人	68.6%	122人	39.0%
千葉	42	12.2	46	14.7
埼玉	40	11.6	84	26.8
神奈川	26	7.6	39	12.4
栃木			10	3.2
茨城			9	2.9
群馬			3	1.0
合計	344	100.0	313	100.0

表2 年代別人数

年度	年代 人数	20代	30代	40代	50代	60代	全体
		S 51	人数(人) 51 比率(%) 14.8	40 11.6	159 46.3	62 18.0	32 9.3
S 61	人数(人) 55 比率(%) 17.6	35 11.2	147 46.9	45 14.4	31 9.9	313 100.0	

III 結果および考察

1 ゆかた保有と着用状況

1) ゆかたの保有状況

ゆかたの保有状況をみると図1のようである。

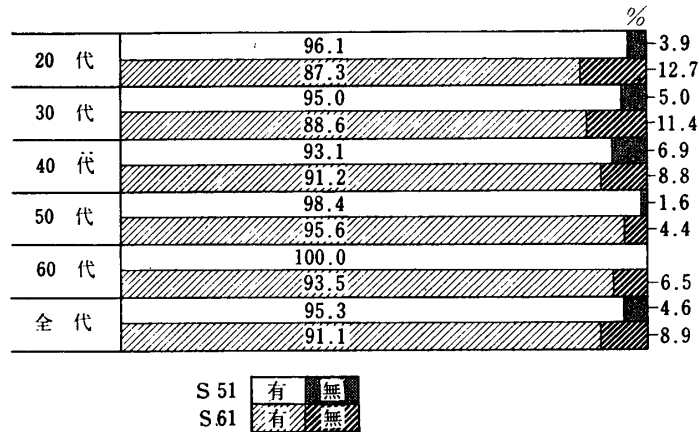


図1 ゆかた保有の有無

S 51年では主婦の95.3%が保有し、S 61年では91.1%で各調査期とも若い年代より年配者の方が保有率が高い。

2) ゆかたの着用状況

ゆかた保有者の前年における着用の有無は図2のようである。

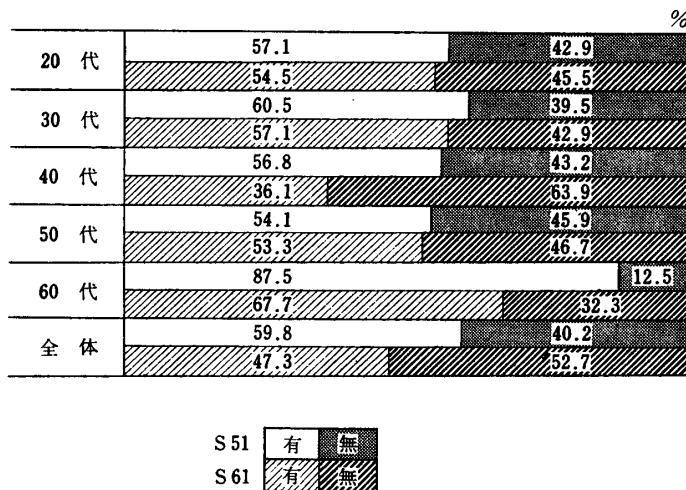


図2 ゆかた着用の有無

各年代を通しての平均をみると、S 51年はゆかた保有者の59.8%、S 61年は47.3%が着用しており、10年の間に12.5%着用者が減っている。

年代別にみると、S 51年では60代が87.5%と多く着用されているが、他の年代には余り差はみられなかった。それがS 61年になると、20、30、50代では余り差はないが、40代が56.8%から36.1%と着用者は著しく少なくなり、60代でも87.5%から67.7%と減っている。それでも60代が67.7%もあるのは、習慣や健康上のためであろうか。

3) ゆかた着用の日数

夏期におけるゆかた着用の日数は表3のようである。但し、1日に何回着用しても1日とした。

表3 ゆかた着用の日数

(単位%)

日数	年代		20代		30代		40代		50代		60代		全体	
	年度		51	61	51	61	51	61	51	61	51	61	51	61
1 ~ 5			80.9	96.7	95.7	95.0	67.8	94.3	63.7	78.3	28.6	33.4	66.6	83.7
6 ~ 10			11.5	3.3			16.7	1.9	6.1	8.8	10.7	9.5	11.2	4.1
11 ~ 15			3.8				1.2			4.3	7.1		2.1	0.7
16 ~ 20							7.1	1.9	3.0		21.4		6.7	0.7
21 ~ 25														
26 ~ 30						5.0	1.2		12.1	4.3	3.6	9.5	3.1	2.7
31 ~ 35														
36 ~ 40							1.2	1.9					0.5	0.7
41 ~ 45										4.3				0.7
46 ~ 50					4.3				6.1		10.7		3.1	
51 ~ 55														
56 ~ 60									3.0			14.3	0.5	2.0
61 ~ 65														
66 ~ 70														
71 ~ 75														
76 ~ 80											3.6	4.8	0.5	0.7
81 ~ 85														
86 ~ 90							1.2				10.7		2.1	
91 ~ 95														
96 ~ 100			3.8				1.2					9.5	1.0	1.3
101 ~ 105														
106 ~ 110														
111 ~ 115														
116 ~ 120							2.4		6.0		3.6	19.0	2.6	2.7
合 計			100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

着用日数はS51年、S61年ともに1日から120日におよんでいる。細かくみると、5日以内の着用者がS51年66.6%、S61年は83.7%と最も多く、ついで6~10日間の順でそれ以上の日数を着る人の数は非常に少なくなっている。

全体的にみて、20、30代では着用日数が殆んど5日以内であるのは、お盆を中心とした着方を示しているのではなかろうか。40代以上になると着る日数もかなり多くなる傾向がみられ、60代でその率が特に高いのは、日常着として着用している人が多いことを示している。また、S51年には20、40、50代でも61日以上着る人がいたのに、S61年には皆無になっている。

60代は61日以上の長期間着用者（ねまき愛用者も）が、S51年からS61年には17.9%から33.3%に増えたことは特異な現象であるが、6～60日の着用者が減って、5日以内の人が増えたことは他の年代と共通の変化である。

一般に、S61年の方がS51年より着用日数が少ないのは、和服離れの傾向であろうか。

4) ゆかた着用の機会

ゆかたをどのような場合に着用するか、その機会についてみると表4のようである。

表4 ゆかた着用の機会 (単位%)

機会	20代		30代		40代		50代		60代		全体	
	51	61	51	61	51	61	51	61	51	61	51	61
家庭でのくつろぎ	43.5	6.4	47.1	6.7	51.5	15.5	43.1	25.6	78.1	44.8	51.0	17.6
外出の時	47.8	21.3	47.1	33.3	32.1	25.9	32.8	30.8	40.6	17.2	37.2	25.7
家庭・外出半々	0	12.8	0	13.3	0	9.5	0	12.8	0	6.9	0	10.7
祭り・盆踊り	32.6	55.3	32.4	43.4	11.2	37.9	10.3	10.3	0	3.4	15.5	33.7
寝る時	4.3	4.2	2.9	0	25.4	8.6	37.9	25.6	34.4	55.2	23.7	14.6
けいごと	4.3	2.1	2.9	3.3	0.7	5.2	0	0	3.1	3.4	1.6	3.4
いつも									0	3.4	0	0.4
その他					0	2.6	0	2.6			0	1.5
合計	132.5	102.1	132.4	100.0	120.9	105.2	124.1	107.7	156.2	134.3	129.0	107.6

(注) 合計が100%をこえるのは複数回答による

S51年では家庭でのくつろぎ51%、外出の時37.2%、寝る時23.7%、祭り・盆踊り15.5%、けいごと1.6%である。年令的にみると、20、30代では外出用に、40代以上では家庭でのくつろぎ用として着用され、60代ではその傾向がいちじるしい。

S61年では祭り・盆踊り33.7%、外出の時25.7%、家庭でのくつろぎ17.6%、寝る時14.6%の順となっており、20、30、40代では、祭り・盆踊り、50代では外出、60代では寝る時が着用の1位である。したがって、S51年では30代までが、レジャー用に着用するものが多かったが、10年後の61年では、その年代が40代となったためか、40代も祭り・盆踊りに着る者が増えている。また寝る時に着用する者は、S51年では全年代にわたっていたが、S61年では60代で急増し、表3と関連づけるとゆかたのねまき着用は高令に限られる傾向がある。

5) ゆかた着用時の下着

ゆかた着用時の下着の有無についてみると図3のようである。

全平均でみると、ゆかた着用時に下着を着ることが多い者はS51年では62.5%、S61年では59.9%、じかに着ることが多い者はS51年では22.2%、S61年では28.8%、下着とじかに着るのが半々の者はS51年では15.3%、S61年では11.3%である。S51年、S61年ともに下着を着て、ゆかたを着用する者が多いが、その中でも20、30、40代はS61年で減少し、50、60代では増

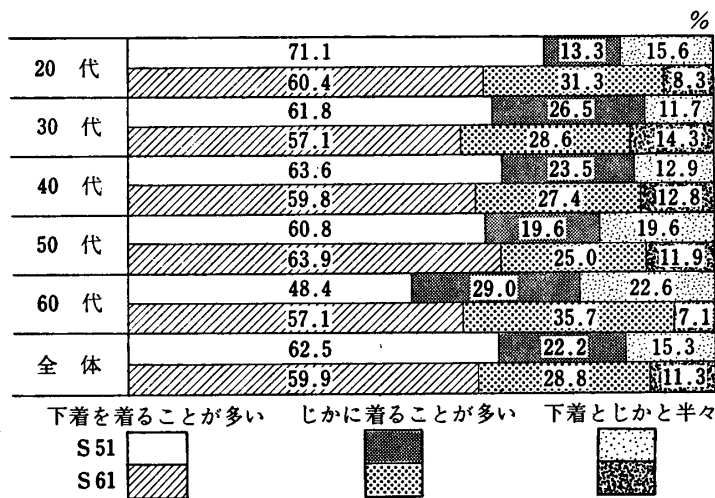


図3 ゆかた着用時の下着の有無

えている。じかにゆかたを着用する者は、各年代ともS61年に増加している。

S51年においては、じかに着る者が多いのは60代、下着を着る者が多いのは20代であったが、これは、若者に洋服着用の場合下着を着る習慣と、60代では、ゆかたは素肌に着るものという観念と習慣があるからと考えられる。また、S61年では年代による着用の差は余りみられない。これは、最近の若者が下着を着ないで洋服を着る傾向が、そのまま影響しているとも考えられる。

6) ゆかたの下着の種類

ゆかたの下着の種類についてみると表5のようである。

表5 ゆかたの下着の種類

(単位%)

年代 年度	20代		30代		40代		50代		60代		全体	
	51	61	51	61	51	61	51	61	51	61	51	61
肌じゅばんとパンティ①	28.2	24.4	24.1	27.3	12.7	18.5	14.0	20.0	4.2	8.7	15.9	19.7
〃 裾よけ②	0	0	3.4	4.5	5.5	7.2	14.0	2.9	33.3	13.0	8.6	5.5
〃 パンティと裾よけ③	15.4	7.3	13.8	22.7	36.3	19.6	41.8	25.7	54.2	56.5	33.1	22.5
スリッパとパンティ④	43.6	56.1	58.7	27.3	39.1	46.4	23.3	45.7	8.3	13.0	36.3	42.7
シャツとパンティ⑤	12.8	7.3	0	18.2	6.4	6.2	4.6	0	0	4.4	5.7	6.4
その他⑥	0	4.9	0	0	0	2.1	2.3	5.7	0	4.4	0.4	3.2
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

全体でみると、肌じゅばん系①②③はS51年57.6%、S61年47.7%で幾分減少しているが、依然着用者は一番多く、ついでスリッパ系④がS51年36.3%、S61年42.7%、シャツ系⑤がS51年5.7%、S61年6.4%の順である。

肌じゅばん系①は、20、30代、肌じゅばん系②は60代、肌じゅばん系③は60代、スリッパ系④は20代に多い。すなわち、肌じゅばんと裾よけは年配者に、スリッパとパンティは若い人向きのようである。

S51年とS61年では肌じゅばん系が減少し、スリッパ系が増加するなど、下着着用方法も年代、時代により差異がみられ、簡略化の傾向にある。

2 肩当ての現状

1) 肩当ての有無

ゆかたの肩当てとその裁ち方は図4のようであり、肩当ての有無についてみると図5のようである。

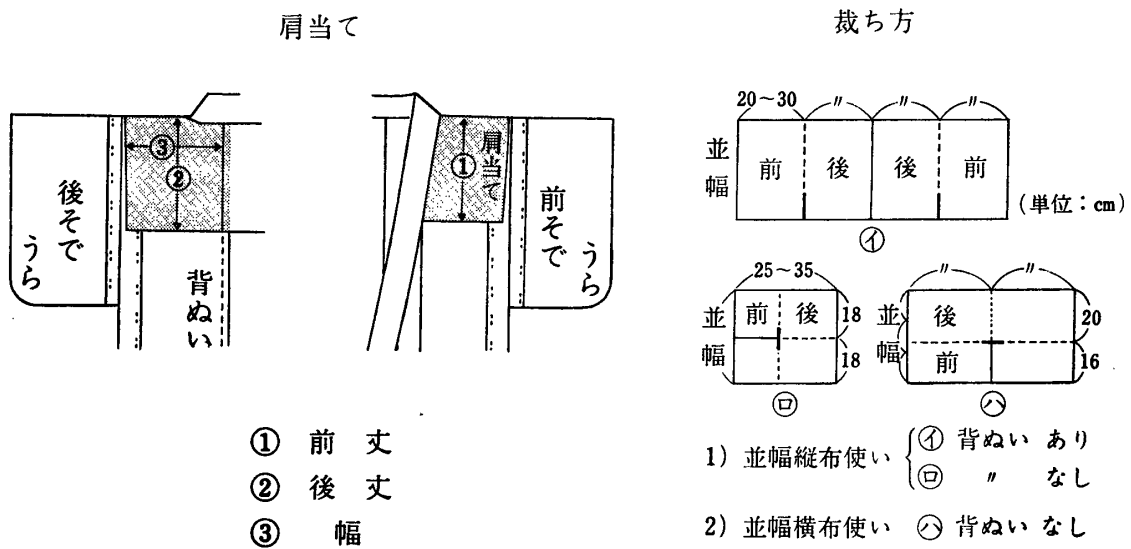


図4 肩当てとその裁ち方

	%	
20代	67.3	32.7
	35.4	64.6
30代	81.6	18.4
	63.3	36.7
40代	88.5	11.5
	78.1	21.9
50代	90.2	9.8
	77.5	22.5
60代	90.6	9.4
	86.2	13.8
全体	85.1	14.9
	69.8	30.2

S51	有	無
S61	有	無

図5 肩当ての有無

S51年では肩当てのついている人 85.1%，ついていない人 14.9%，S61年では，ついている人 69.8%，ついていない人 30.2%であった。

全体的には肩当てのついている人が多いが，S51年からS61年の10年間に，ついていない人が約2倍に増加している。ついている人は60代が最も多く，20代が最も少なく，S61年の20代では肩当てのついていない人が64.6%と非常に多いのは，明確な原因はつかめないが，時代の変化に対応したものであろうか。

そこで筆者はS61年7月に，都内のデパート4店，呉服店4店，個人仕立て屋3件，合計11件の聞き取り調査を行なったがそれによれば，店側は必ず，お客様に「肩当てはどうしますか」と伺い，客の要望に答える。もし要望がなければ，三日月型の力布をつける（7件），衿肩まわりだけの小さな晒もめん，または共布をつける（4件）とのことであった。これらの状況からも肩当てのついていないものが出回ることが推測される。

2) 肩当ての長さ と 幅

(A) 肩当ての前丈

肩当ての前丈は図6のようであり，三日月型の力布を除き，S51年では4～30cmの範囲で付けられ，その中15～17cmのものが20.7%と最も多く，ついで19～21cm 17.3%，9～11cm 15.9%の順となっている。

S61年では29～31cmが29.2%と最も多く，ついで15～17cm 17.2%，19～21cm 16.6%の順で，

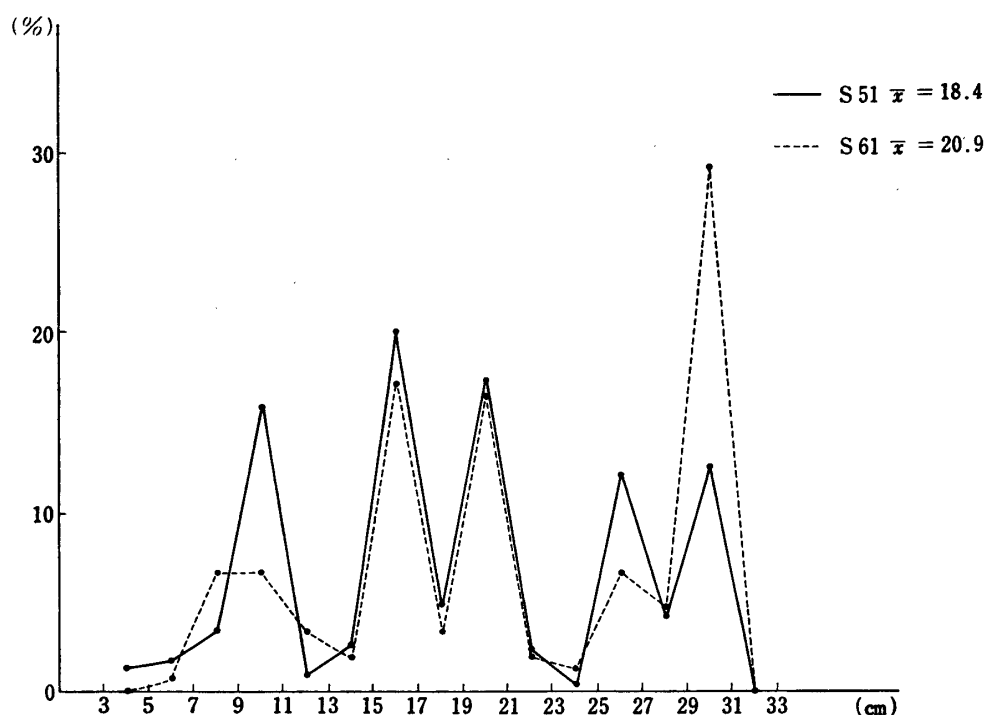


図6 前 丈

図からも明らかなように約5cm間隔で丈が決められているものが多い。

平均前丈は S 51年約18cm, S 61年約21cmで, S 61年が約 3 cm長い。

(B) 肩当ての後丈

後丈は図 7 のようであり, S 51年は 4 ~ 34cm の範囲で, 29 ~ 30cm のものが 22.4 % と最も多く, ついで 19 ~ 21cm 18.5 %, 25 ~ 27cm 17.7 % の順であり, S 61年は 29 ~ 31 cm が 35.7 %, 19 ~ 21 cm が 19.9 %, 15 ~ 17cm, 25 ~ 27cm 12.6 % の順で, 約 5 cm 間隔に S 51年, S 61年ともに鋸歯状の図を描き同様の傾向をたどっている。

平均後丈は S 51年では約 21cm, S 61年では約 23cm で S 61年の方が約 2 cm 長い。

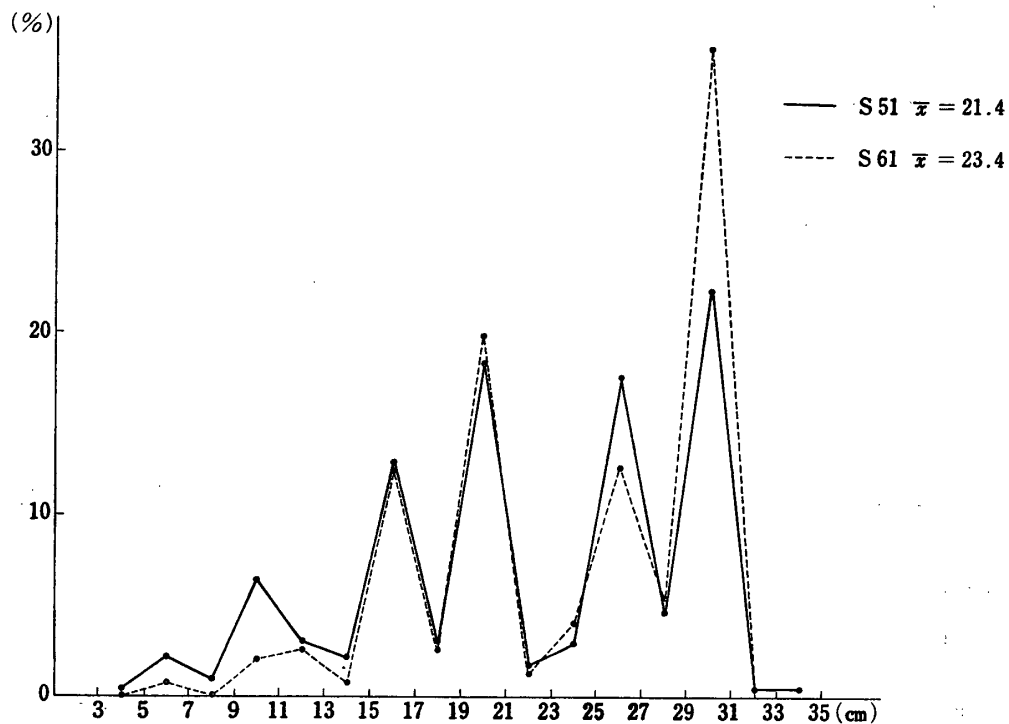


図 7 後 丈

(C) 肩当ての丈 (前丈+後丈)

肩当ての丈の長さは図 8 のようであり, S 51年は 10 ~ 60cm におよんでおり, 56 ~ 61cm のものが 15.5 % と最も多く, ついで 31 ~ 36cm が 13.8 %, 26 ~ 31cm, 46 ~ 51cm がそれぞれ 13.4 %, 41 ~ 46 cm が 8.6 % の順で平均は約 40cm であった。

S 61年は 56 ~ 61cm が 31.7 %, 26 ~ 31cm が 11.9 %, 31 ~ 36 cm, 36 ~ 41 cm がそれぞれ 11.3 %, 46 ~ 51cm が 9.9 % の順で, 平均は約 44cm で S 51年より 4 cm 長い。

ちなみに裁縫書の肩当ての長さの調査によれば図 5 のように

1) 肩当ての丈 (前丈+後丈) は 40 ~ 60cm の範囲で, 前丈・後丈を同寸, または後丈を前丈より (3 ~ 10cm) の差をつけて長くする方法 (㊶㊷)

2) 並幅横布使いで前丈・後丈を同寸, または並幅の 3 分の 1 を前丈など, 前・後丈に差をつけて, 後丈を長くする方法 (㊸) である。

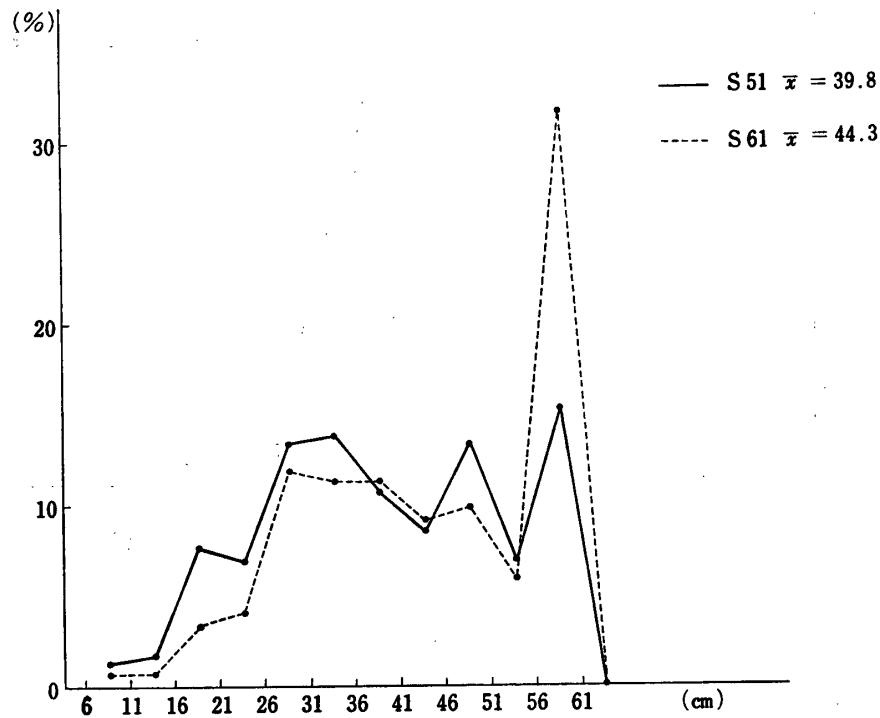


図8 肩当ての丈（前丈+後丈）

本調査における肩当ての長さは1), 2)の方法とほぼ一致するが、前丈の方が後丈より長い逆もあった。

(D) 肩当ての幅（片身頃）

肩当ての幅は図9のようであり、27~29cmの長さのものがS51年45.3%、S61年37.8%と最も多く、ついで29~31cmがS51年17.3%、S61年27.2%、25~27cmがS51年9.1%、S61年7.3%の順であった。

肩当ての幅の平均はS51年、S61年ともに約27cmであった。

以上の点から肩当ての幅の長さからみて、片身頃が並幅のもの、並幅の2分の1のもの、並幅の横布使いのものの3種類の方法が使用されているが、片身頃並幅使いのものが最も多い。

3) 肩当ての必要性

肩当ての必要性の有無は図10のようであり、内容的にみて必要であると思う者は、S51年62.5%、S61年44.7%、必要でないと思う者はS51年13.1%、S61年22.1%であった。S61年では必要とする者が約18%減り、必要ないとするものが9%増加している。

肩当てを必要とするものは年配者ほど多く、60代ではS51年90.6%と圧倒的に多かったが、S61年には77.3%まで減少している。不必要とするものは20代に多く、またどちらとも言えないとする中間層もかなりある。これは経験の程度による差であろうか。

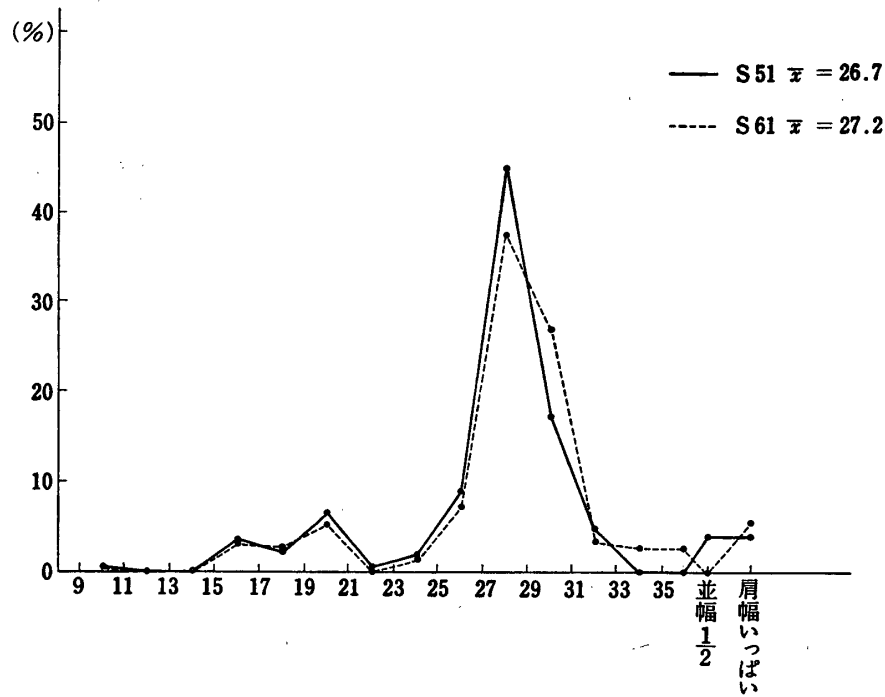


図9 幅

	%		
20代	43.1	15.7	41.2
30代	45.0	17.5	37.5
40代	65.4	14.5	20.1
50代	67.7	8.1	24.2
60代以上	90.6	6.3	3.1
全体	62.5	13.1	24.4

必要 (S51: white, S61: diagonal lines) 必要なし (dotted) どちらとも言えない (cross-hatched)

図10 肩当て必要の有無

肩当ての有無別による必要性は図11のようであり、肩当てのついている人は各年代ともに必要性が高く、年配者になるほど高くなっている。必要性の平均は S51年 74.2%，S61年 69.1% で、年度別差異はあまりみられなかった。

肩当てのついていない人は、各年代ともに肩当てを不必要とする者が多く、S61年の方がその比率が高い。平均は S51年 44.9%，S61年 59.8% で、どちらとも言えない者が S51年 40.8%，S61年 35.3% とかなりあった。

肩当ての有無別による着用者には、それなりの理由があるようである。

		%		
肩当てのある人	20代	54.5	6.1	39.4
		52.9	5.9	41.2
	30代	58.1	12.9	29.0
		68.4	5.3	26.3
	40代	77.1	10.7	12.2
		63.0	10.0	27.0
	50代	74.5	3.6	21.9
		75.8	15.2	9.0
	60代	100		
		96.0		4.0
	全体	74.2	7.9	17.9
		69.1	8.8	22.1

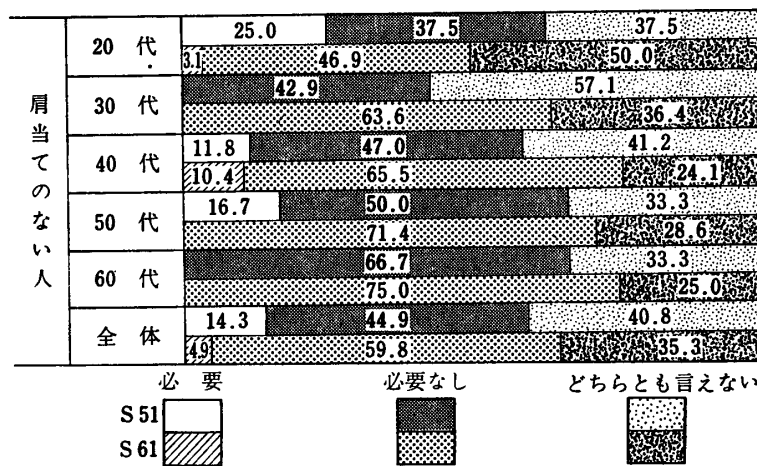
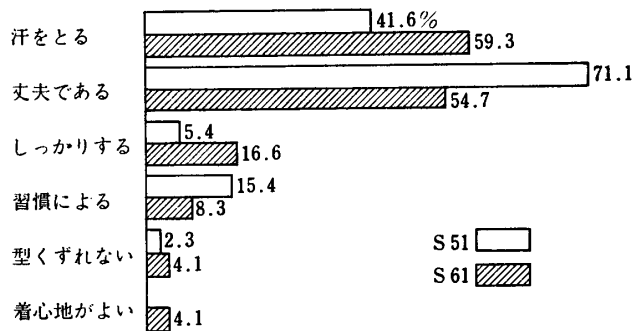


図11 肩当ての有無別による必要性

4) 肩当ての必要・不必要とする理由

肩当てを必要とする理由を解答の多い順に並べると図12のようであり、S51年5項目、S61年は6項目あげられた。



(注) 合計が100をこえるのは複数回答による

図12 肩当てを必要とする理由

S51年は「丈夫である」71.1%、「汗をとる」41.6%、「習慣による」15.4%の順であり、S61年は「汗をとる」59.3%、「丈夫である」54.7%、「しっかりする」16.6%である。

S51年とS61年では順位は異なるが、従来からの肩当ての目的を述べているものが多い。

不必要とする理由は図13のようであり、S51年、S61年ともに8項目あげられ、主なものはS51年「暑い」52.1%、「理由は言えないが必要性がない」25.1%、「手入れめんどろ」22.9%、「肌着を着るから」20.8%であり、S61年は「暑い」37.8%、「手入れめんどろ」15.9%、「外観がよくない」14.6%、「肌着を着るから」13.4%の順である。

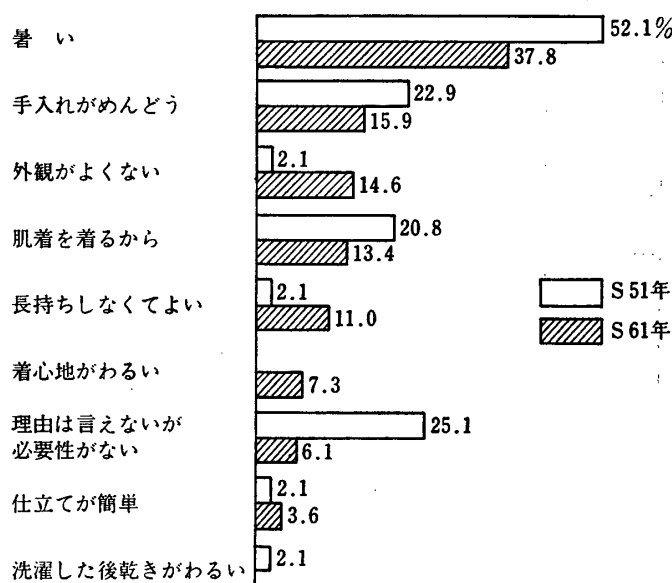


図13 肩当てを不必要とする理由

S61年には「外観がよくない」という、おしゃれ感覚がみられ、肩当てがなくても下着を着るので汗をとる役目は果され、その上涼しく、手間がはぶけるといった面と、物が豊富である今日では長持ちをさせる必要もなく、また自分で仕立直しのできる人も少なくなっているし、丈夫さよりも新調して、おしゃれを楽しむという傾向が現われているようである。

IV まとめ

以上の結果をまとめると次のようなことが言える。

1) 主婦とゆかたの関わり合いはS51年とS61年の変化をみると、保有者は95%と約91%でわずかに減り、着用率は約60%から約47%に減少している。また着用日数は5日以内のものが多く、年配者になるにしたがって着用率、日数共に多くなる。また、着用率および着用日数の両方から和服離れの傾向がみられる。

2) ゆかた着用の機会はS51年では家庭のくつろぎが主で、ついで外出時であったものが、S61年には主に祭り・盆踊りなどレジャーや外出向きとなっている。それも祭り・盆踊りに着る年代が上っているのも新傾向である。

3) ゆかた着用時に下着を着る者はS51年、S61年とも多いが、じかに着る割合はS61年の方

が高い。

下着としては、若い人はスリッパとパンティーを、年配者になるにしたがって、肌じゅばんと裾よけを用いる。しかし、S61年では肌じゅばん系が減少し、スリッパ系が増加している。下着も簡略なものが好まれるようになり、若い人ほどその傾向が強い。

4) 各人保有のゆかたの肩当ての有無については、S51年の約85%がS61年には約70%に減っている。ついていない人はS61年でみると20代が約65%、30代では約37%と若い人に多く、近年ついていないものが目につくようになってきた。ついていない人は、衿肩回りに力布を用いている。

5) 肩当ての長さは、前後丈それぞれ4~34cmと相当のひらきがあった。

前丈と後丈との関係は同寸、あるいは前丈よりも後丈が2~15cm長いものが多く、また、その反対のものもあった。

肩当ての布使いは、背縫いのあるもの、並幅を縦布に使ったもの、並幅を横布に使ったものの3種類の方法のものが主であった。

6) 肩当ての必要性については、必要とする者がS51年では約63%であったが、S61年では約45%となり、各年代ともに必要とする者の比率が低くなり、20代では約18%に過ぎない。これは感覚的なものによるものであろうか。一方、専門職による既製ゆかたは、肩の辺りのシルエットを美しくするために、肩当てを省いて単に力布だけで仕立てる傾向が認められる。

7) 肩当て必要の理由は「習慣だから」「丈夫さのため」という考えが減って、「汗をとる」「しっかりする」「型がくずれない」「着心地がよい」という理由が増えたのは、経済的や他律的な理由がなくなって、必要さの理由が自覚されていることが認められる。

不必要の理由は「暑い」「手入れめんどろ」「下着を着るから」などであるが、新しく「長持ちしなくてもよい」「仕立ての簡便」が増えている。これも経済上の理由がなくなって、簡便さを求める時代の風潮によるものである。

8) ゆかたはレジャー着、おしゃれ着として着用されるようになって、従来の肩当ての必要感は薄くなり、各人の着用状態や好みにより、つけるつけないは自由に変化しつつある。

以上を総合的に考察すると、被服構成実習において、縫製の簡略化と着装時の軽快さから新しい対策を考える必要があり、加えて汗の処理という衛生的見地と形を整えるためという理由から「晒もめんの並幅を横に使う肩当て」を主な方法としてとりあげたいとの結論に至った。なお、学生の技能が進めば三日月型や力布のみの処理法も適宜指導するのが適当と考える。

参考・引用文献

- 1) 石田はる：和裁（主婦の友社）1983
- 2) 池部，川村，佐野，柴田，田尻，永井：新和服裁縫（建帛社）1985
- 3) 大塚末子：新しい和裁（同文書院）1983
- 4) 織田稔子：新しい和裁（永岡書店）1984

- 5) 清水とき：きもの全科（家の光協会）1974
- 6) 滝沢ヒロ子：新しい和裁全書（永岡書店）1983
- 7) 土井幸代：和裁（同文書院）1983
- 8) 大学・短期大学和服研究会編：現代の和服（相川書房）1985
- 9) 田中千代：服飾事典（同文書院）1970
- 10) 丹野郁：総合服飾史事典（雄山閣）1980